

成果2 <sup>りよくゆうとうき りんか わん</sup> 緑釉陶器の輪花埴について

多賀城跡出土品のうち最も残りが良い緑釉陶器で、口縁部にある4つの切り込みで花びらを表現した4輪花の埴です。内面には横と上からみた蓮の花が丁寧に描かれています。大型品で写実的な装飾性に富む全国でも十指に入る優品です。その特徴から尾張国（現在の愛知県）の猿投窯で、9世紀前半に生産されたと考えられます。平安京の冷然院（讓位した嵯峨天皇の御所）や、平安宮で出土したものと同格の高級食器です。



律令国家における陸奥国府多賀城の重要性や、五万崎地区官衙の格式の高さを示す出土品であるとともに、五万崎地区官衙の機能を考える上で貴重な資料です。



まとめ

- 1 五万崎地区官衙東部の土地利用の変遷が推定できました
- 2 緑釉陶器輪花埴の優品が出土しました

調査要項

所在地：宮城県多賀城市市川字五万崎地内  
 調査指導：多賀城跡調査研究委員会（委員長 佐藤 信）  
 調査主体：宮城県教育委員会（教育長 高橋 仁）  
 調査担当：宮城県多賀城跡調査研究所（所長 古川一明）  
 調査協力：多賀城市教育委員会

調査員：古川一明・白崎恵介・村田晃一  
 生田和宏・村上裕次・高橋 透  
 調査期間：平成30年8月20日～11月30日（予定）  
 調査面積：約200㎡



宮城県多賀城跡調査研究所  
 〒985-0862 宮城県多賀城市高崎1-22-1  
 TEL：022-368-0102  
 FAX：022-368-0104  
<http://www.thm.pref.miyagi.jp/kenkyusyo/>



# 多賀城跡

第92次調査現地説明会  
 平成30年11月3日（土）  
 午前10：30～



図版1 多賀城跡と調査区の位置（南西から）

はじめに

宮城県多賀城跡調査研究所では昭和44年以来、特別史跡多賀城跡の発掘調査と環境整備を継続して行なっています。近年は多賀城の南の区画施設（外郭南辺）の調査を進めており、今年度は第92次調査として、五万崎地区で調査を実施しています（図版1・2）。

その目的は、多賀城跡第I期外郭南辺のうち、外郭南門から西へ延びる部分の規模・構造を確認するとともに、五万崎地区の実務官衙の広がり（はあく）を把握することです。



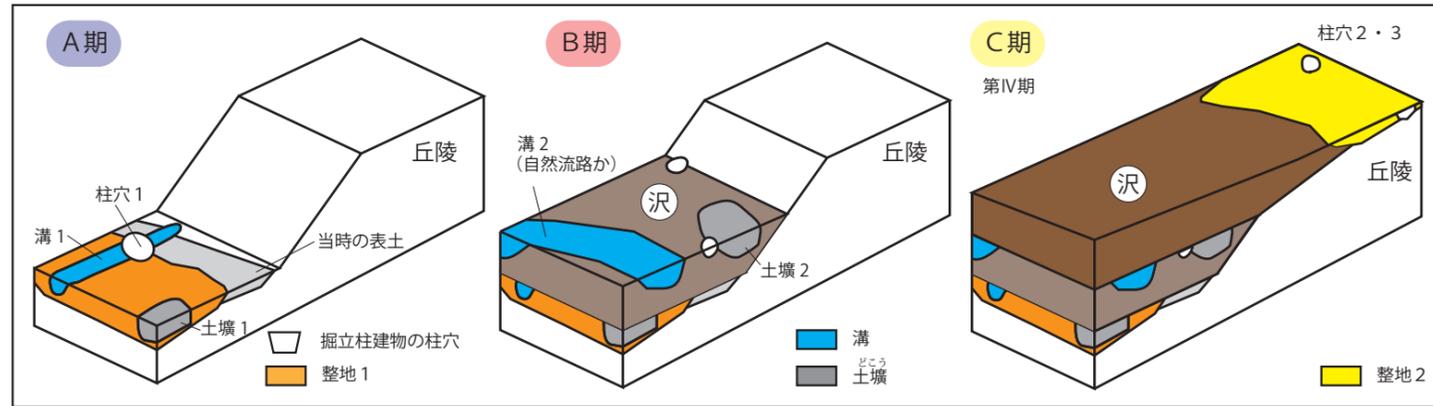
図版2 政庁・外郭南門と調査区の位置（南から）

# 調査成果

第92次調査では、第84次調査で土取り穴と推定した穴の北側に第I期の外郭南辺が存在することを想定できたので、その北西側に調査区を設定しました(図版5)。調査の結果、第I期の外郭南辺は確認できず、外郭南辺はさらに北を通る可能性が高まりました。また、調査区付近の古代の地形は北東の丘陵の高まりから南西の低い沢に至る斜面となっていたことが判明しました。遺構は掘立柱建物の柱穴・溝・土壙(穴)などを検出しました。遺物は土器・陶磁器・瓦・金属製品などが出土し、特に緑釉陶器の輪花埴が注目されます。以下、主な成果として調査区付近の土地利用の方法と変遷及び緑釉陶器の輪花埴について述べます。

## 成果1 五万崎東部地区の土地利用の方法と変遷 (図版3・4)

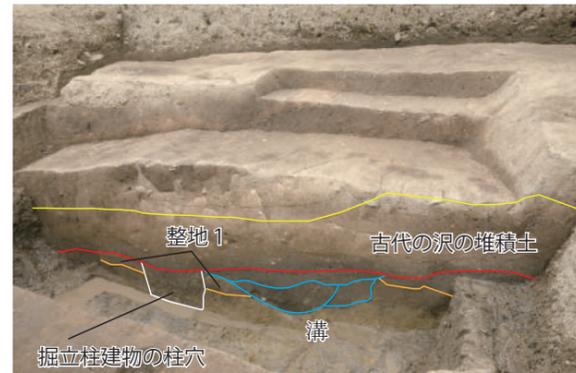
遺構はA～C期に大別できます。【A期】丘陵下のなだらかな斜面の低地部分を切土・盛土整地して平坦にし、掘立柱建物や溝・土壙が造られます。その後、【B期】土砂や遺物の流入によって沢が埋まっていく過程で土壙などが造られ、【C期】沢が埋まって浅くなると、丘陵斜面から沢の縁にかけて盛土整地し、掘立柱建物が造られるようになります。年代について、C期の掘立柱建物は、隣接する第84次調査検出の掘立柱建物群の1つとみられることから、第IV期である可能性が高く、A・B期はそれ以前と考えられます。五万崎東部地区にあたる調査区付近は、実務官衙の敷地として、沢の縁まで利用したようです。



図版3 調査区付近の土地利用変遷 (南西から北東方向：概念図)



1. 丘陵と沢の高低差 (南西から)

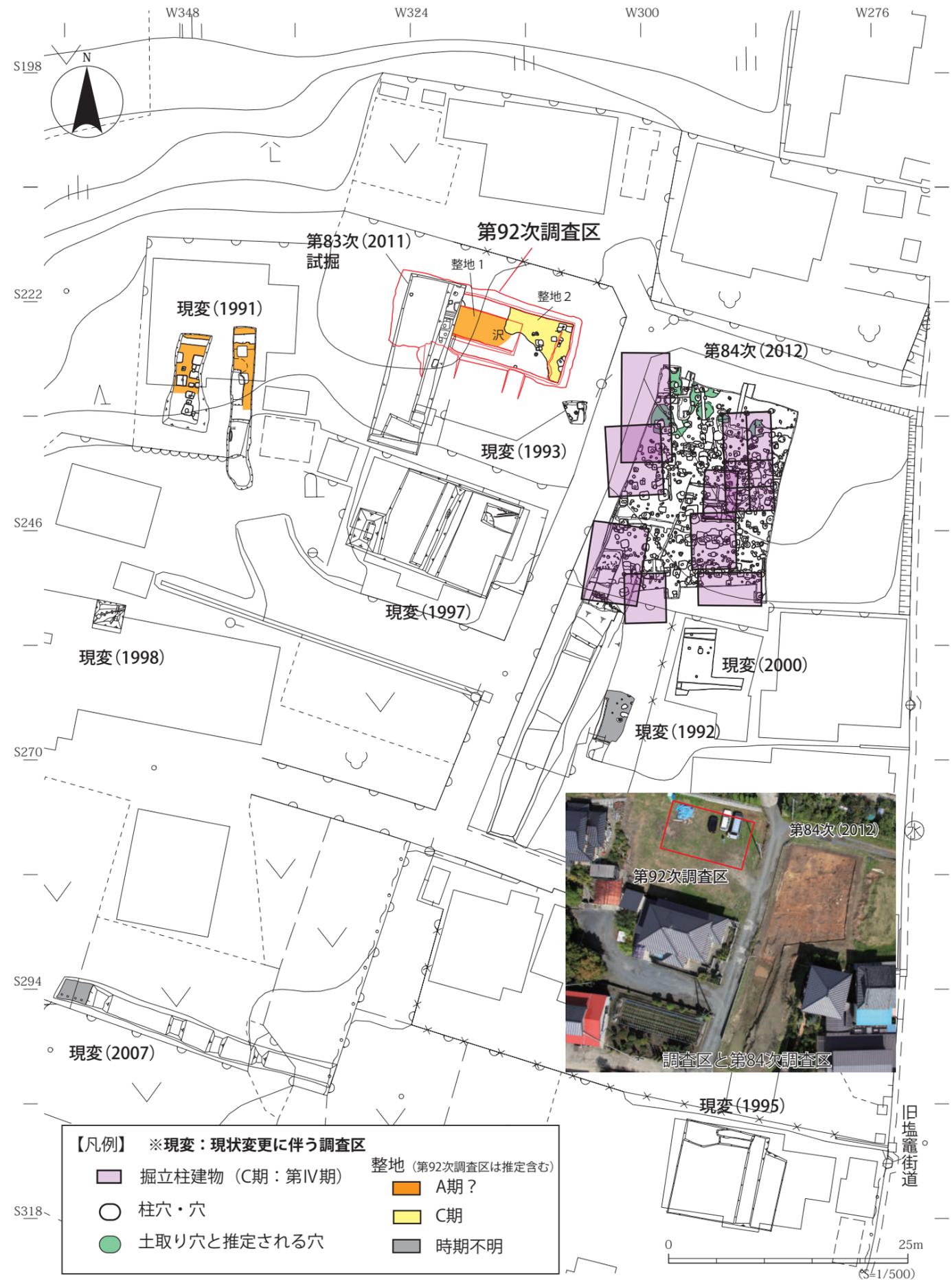


2. 沢の堆積状況と遺構 (断面：東から)

沢の深さは2m以上もあったんだ!



図版4 沢と遺構



図版5 第92次調査区と過去の調査区